

小田島樹人研究(Ⅱ) —『音楽秋田』の論説に見る音楽観, 音楽教育観—

佐 川 馨

地域教育文化学部 地域教育文化学科

山形大学紀要（教育科学）第16巻第1号別刷

平成26年（2014）2月

小田島樹人研究(Ⅱ) —『音楽秋田』の論説に見る音楽観、音楽教育観—

佐 川 馨

地域教育文化学部 地域教育文化学科

(平成25年9月26日受理)

要 旨

本稿の目的は、月刊『音楽秋田』における小田島樹人の論説を考察し、その音楽観及び音楽教育観を明らかにすることである。また、関連する記事内容から第二次大戦後の復興期における秋田県の音楽事情の一端も明らかにしたい。

『音楽秋田』は、秋田学生音楽連盟が昭和25(1950)年9月10日に発刊したタブロイド判の新聞である。記事内容は秋田県内の演奏会情報、県出身の演奏家の動向、音楽愛好団体の紹介などの地域的话题性に富んだものから、樹人と同時期に東京音楽学校で学び、後に同校教官を務めた牛山充による音楽史研究の論考など多岐に亘っており、樹人の音楽観、音楽教育観とともに当時の地方の音楽事情を考察する上で大きな価値をもつ資料である。

樹人が担当した論説及び関連の記事内容を考察した結果、昭和20年代半ばの秋田県では戦後の混乱から落ち着きを取り戻し始め音楽を楽しめる環境が急速に整っていったこと、しかし一方では音楽に対する旧来からの無理解や偏見も多く見られたこと、そしてそのような状況の中、小田島樹人は自己の音楽観、音楽教育観を『音楽秋田』の誌上で強く訴え、地域の音楽活動を啓発する役割を担ったことなどが明らかとなった。

1. はじめに

第1報¹⁾では、童謡創作の分野において高い評価を受けている小田島樹人(1885-1959)の生涯を三つに区分して概観し、教育業績を考察した。その結果、①鹿児島第七高等学校造士館理科を中退し東京音楽学校に入学した樹人は、在学中に校友会雑誌『音楽』に複数の論文を発表²⁾するなど、本科器楽科で専攻したピアノの力量以上に文筆の能力に秀でたものがあったこと、②海野厚との出会いにより童謡の創作活動を始め、『おもちゃのマーチ』『赤い櫓』などの優れた童謡作品を発表するが、海野の死後は創作よりも音楽教育現場の声に直接応えることのできる教材集の編集出版に重点を置いて取り組んだこと、③妻の死を契機に秋田県に帰郷し、県立花輪高女、秋田中学において教育実践に力を注ぐ一方で、月刊『音楽秋田』を発刊するなど、生涯学習を含めた地域の音楽教育活動全般を牽引する役割を果たしたこと、などが明らかとなった。

第2報である本稿の目的は、第1報に引き続いて樹人の生涯に注目し、秋田中学で教鞭

を執っていた当時に発刊した月刊『音楽秋田』の論説記事から音楽観及び音楽教育観を明らかにすることである。加えて、関連する記事内容から第二次大戦後の復興期における秋田県の音楽教育及び洋楽普及の状況も明らかにしたい。

東北地方の音楽教育や洋楽普及等については、吉田九五郎³⁾が岩手県の音楽教育草創期における唱歌教育の状況を、師範学校附属小学校の実践に焦点をあてて論じている。また、安田寛と北原かな子の一連の研究⁴⁾では、弘前の洋楽普及と唱歌教育普及の背景にはプロテスタントの布教活動に伴う讃美歌の影響があることを明らかにしている。笹森健英と今井民子⁵⁾も明治期の弘前における洋楽普及の状況を当時の唱歌教育実践の詳細な考察から論じている。そして、拙稿⁶⁾では明治期の秋田県の音楽教員の系譜と唱歌教育普及について論じ、府県派出伝習生として東京音楽学校に派遣され、秋田県人として初めて西洋音楽を系統的に学んだ青柳（半田）左武郎が、地域の音楽教育の開拓者として師範学校を中心に教育活動を展開したことなどを明らかにした。

しかし、これらに共通していることは、いずれも明治期の音楽教育、洋楽普及という視点である。音楽教育史研究において第二次大戦後の復興期に関わる地方の音楽事情の解明は、管見ではあるが手薄の感が否めない。戦後の混乱がようやく落ち着き始める時期の地方の音楽事情がどうであったか、また樹人のような音楽教師たちが音楽についてどのように考え、どのように新しい時代の音楽教育を模索していったかを探ることも意義あることと考える。

研究を進める上で手掛かりとする資料は、樹人が昭和25（1950）年に発刊した『音楽秋田』である。所在の確認されている9月10日発行の創刊号から昭和26（1951）年6月15日の第6号までを対象とする（表1）⁷⁾。

表1 『音楽秋田』の発行状況

号	発行年月日	頁数
1	昭和25 (1950) 9月10日	2
2	昭和25 (1950) 10月10日	2
3	昭和25 (1950) 11月20日	4
4	昭和25 (1950) 12月20日	2
5	昭和26 (1951) 1月30日	4
6	昭和26 (1951) 6月15日	2

『音楽秋田』の記事内容は、「論説」「研究」、地域の音楽関連情報を中心とした「地方楽信」「音楽批評」、「音楽関連行事」の紹介、中央で活躍する「秋田県出身の音楽家の動向」、また毎号の共通記事として、個人の音楽愛好者を紹介する「秋田好楽家列伝」、地域の音楽団体を紹介する「秋田合唱合奏団めぐり」からなる。これらのうち、樹人が主筆として担当した論説を手掛かりに音楽観、音楽教育観を考察していく。また、関連する記事内容からは第二次大戦後の復興期における秋田県の音楽事情の一端も明らかにしたい。

『音楽秋田』は、当時の秋田県において大学の教員から中学校及び高等学校の教員と生徒達、また民間の音楽愛好者の多くが関係した音楽の出版物である。樹人の音楽観、音楽教育観とともに当時の地方の音楽事情を考察する上でも大きな価値をもつ資料といえる。記事内容の分析・考察によって戦後復興期の地方における音楽事情も解明されるであろう。

2. 小田島樹人と月刊『音楽秋田』

(1) 小田島樹人について

小田島樹人は明治18（1885）年3月19日、秋田県鹿角市花輪に生まれた作曲家、音楽教育者である。本名は次郎という。樹人が生まれた当時の鹿角地方は、12（1879）年に大湯村に日本ハリストス正教会が開かれる⁸⁾など、西洋の文化をいち早く取り入れようとする進取精神の旺盛な地域であった。そのため、西洋音楽の導入も他に先駆けて行われ、22（1889）年6月には花輪小学校と毛馬内の高等小学校にオルガンが設置、翌23（1890）年にはオルガンを使った唱歌の授業が試みられている⁹⁾。

樹人は32（1899）年、盛岡中学（現県立盛岡第一高等学校）に進学し、37（1904）年3月には家業の酒造業を継ぐため、卒業と同時に鹿児島県の第七高等学校造士館で化学薬学を専攻する¹⁰⁾。しかし、翌38（1905）年の花輪大火で生家の酒造店が類焼¹¹⁾したことを契機に二次で中退し音楽の道を志すようになる¹²⁾。そして41（1908）年3月に東京音楽学校に入学し、予科1年を経て順調に本科器楽科に進級するも、病氣療養のために途中2年ほど遅れ、大正3（1914）年に本科器楽科を卒業する¹³⁾。

樹人が東京音楽学校を卒業し音楽教育者として活躍し始める大正期は、鈴木三重吉らが創刊した『赤い鳥』などの童謡運動の興隆期と重なり、樹人も童謡作曲家の一人として活躍をする。大正11（1922）年には東京音楽学校入学以来の親友でもあった中山晋平や、外山国彦、詩人の海野厚らと「鳩の笛社」を立ち上げ、子供達の歌第一集『赤い鳩』、同第二集『七色鉛筆』、同第三集『背くらべ』を次々と刊行した。中でも第二集に収録された《おもちゃのマーチ》は、樹人の代表作として今なお歌い継がれる名曲である。

童謡の創作の他には、白眉社で唱歌教材集の編集出版も手掛け順風満帆の身であったが、妻綾野が流行性の感冒に罹り¹⁴⁾昭和8（1933）年に亡くなってからは、幼い子供たちの世話もあり、生活は困窮を極めるようになる。11（1936）年、見かねた実弟、阿部六郎の勧めにより樹人は鹿角に帰郷し、六郎が教頭を務めていた県立花輪高等女学校で音楽と国語の講師として教育者としての道を歩むことになる¹⁵⁾。樹人、51歳のことである。

15（1940）年、樹人は秋田中学に転任する。戦中、戦後の混乱期を経て、漸く落ち着いて音楽教育に取り組むことが出来るようになった時期に秋田学生音楽連盟が結成される。

(2) 秋田学生音楽連盟の結成

秋田学生音楽連盟は終戦の混乱から日本全体がようやく立ち直りつつある中、昭和23（1948）年に結成された秋田音楽同好会から派生する形で24（1949）年7月に発足した学生による音楽団体である。結成の目的は「音楽芸術の普及を図り会員相互の音楽教養の向上と音楽芸術に対する認識の育成に努める」ことであり、事業として「他の音楽文化諸団体と提携し著名なる演奏家、作曲家、音楽評論家等を招き演奏会、研究会等を開催する」ことや「音楽発表会の開催」などに取り組むことを目指した¹⁶⁾。

結成当初の活動は、選出された11名の役員が会員に対して鑑賞希望のアンケートを行い、その結果に基づいて秋田音楽同好会とともに中央から著名な演奏家を招き、学生及び市民に良質の鑑賞機会を提供するというものであった¹⁷⁾。表2は昭和24年の音楽同好会的主催行事及び24、25年の学生音楽連盟の主催行事の一覧¹⁸⁾である。当時の地方の音楽事情の一端を示すものとして掲載する。

表2 昭和24, 25年当時の主催行事

音楽同好会 24	5月23日	レオニード・クロイツァーピアノ演奏会
	6月20日	ウイリー・フライヴァイオリン演奏会
	8月10日	牛山充音楽鑑賞講座
	8月20日	プロムナードコンサート
	9月23日	服部島田バレエ団公演
	10月10日	砂原美智子独唱会
	11月17日	第1回秋田県音楽コンクール
	11月18日	野村光一ショパン音楽講座
学生音楽連盟 24 25	7月未詳	レコード・コンサート(樹人解説)
	8月未詳	レコード・コンサート(樹人解説)
	9月24日	黒沢真澄ヴァイオリン独奏会
	11月5日	佐藤良雄チェロ独奏会
	11月23日	バリトン鈴木重教独唱会
	5月9日	諏訪根自子ヴァイオリン独奏会
	6月17日	奈良洋子ピアノ独奏会
	6月24日	フランセス・カサード独唱会
	9月13日	原智恵子ピアノ独奏会
	9月16日	学生音楽連盟発表会
	10月6日	牛山充バレエ音楽講座
	10月7日	第2回音楽コンクール

これらの音楽行事や当時の秋田県の音楽事情全般を総括して、秋田大学学芸学部教官の金田茂が『音楽秋田』第1号（昭和25年9月10日）において「本県音楽界の動向」と題して次のように述べている。

終戦当時の虚脱状態より漸く立直った本県の音楽界は最近活気を取り戻した観がある。昨年は芸術的な要求に基づいて自律的に音楽活動をなそうとする傾向が見られ其の第一歩を印したとの感が深かった。

秋田音楽同好会は23年度より活動を始めており去年は次の催がなされた。〔中略、表2参照〕

秋田学生音楽連盟は昨年七月結成を見、次の行事がなされた。〔中略、表2参照〕

真澄さんは隆朝氏の令息である。当夜氏の歓迎座談会において楽器学の立場より音楽の起源及音階成立についての貴重な説を聴いた。今後もこのような催を切望する。

秋田合唱連盟は7月3日結成されこれと呼応する如く、鹿角合唱連盟の結成を見、それぞれの発表会があった。また秋田音楽教育連盟は6月に組織された。これは小中学部、高等部とよりなりそれぞれの独自の活動と本県教育の一貫性を保って有機的な音楽教育活動を行おうとするものであった。10月1日、2日共上氏等講師として来秋し秋田大学学芸学部附属において講習会が行われた。

朝日新聞主催近衛秀麿指揮の東宝交響楽団の演奏は9月7、8の両日行われ、地方として管弦楽に接するの機会を得たわけである。また山城少塚等一行の文楽興業が8月10日に行われ我国古典芸術の粹を見せてくれた。地方の演奏としてはピアノ塾絃友会、カンパネラコール等の発表があった。また山本郡の柴田氏が中央の作曲募集に入選されている。

以上は昨年度の動向であるが本年に入って同好会と学生の音楽連盟とによって次の催しが行われた。〔中略、表2参照〕

レコード鑑賞方面では湯瀬氏を講師とする鑑賞が数回行われている。次に本年も新たな音楽

連盟が職場に結成され、第1回の発表があった。

音楽活動は学校と社会に分けて考えられるが社会の方は一応置いて、学校方面を一考したい。本県の音楽教育を推進せしめるべく生まれたはずの連盟はその後どうしたのだろう。音楽教育において従来の如く歌唱のみで事足りりとするようでは到底正当な教育はあり得ない。地方に講習に行っても解るが、よい講習を数多くと望んでいるし、また熱心に研究している人も多い。これらの研究は発表される機会を持ち音楽自身、または教育上の意見は交換されなければならない。このたび中央に音楽教育界が誕生したがこれらに応ずるためのよい機関であろう。本県もこのような機関が是非とも欲しい。音楽をもっと学的（ママ）に組織的に研究しなければ到底新教育に応じられるものではないのである。

昭和24、25年当時は、金田が述べるように地方においても戦後の混乱から落ち着きを取り戻し始め、ようやく音楽に気持ちを向ける余裕が出てきた時期であり、秋田県においても国内外の名だたる演奏家が多数出入りしていることが分かる。一方で、金田の言説にはそれまで軍国主義、超国家主義の一手段として取り扱われる面も強かった戦前の学校音楽教育が、試案として出された学習指導要領を手引きに新しい時代の音楽教育の展開を試みようとするも、教師たちが研究団体を立ち上げて継続すらままならず、新しい教育に向けての組織的な研究活動が進まないことへの苛立ちが滲んでいる。

(3) 『音楽秋田』の発刊

『音楽秋田』は、連盟発足1年後の25（1950）年9月10日に発刊されたタブロイド判の新聞である。記事内容は、秋田県内の演奏会情報、県出身の演奏家の動向、音楽愛好団体の紹介などの地域の問題性に富んだものから、樹人と同時期に東京音楽学校で学び、後に同校教官を務めた牛山充による音楽史研究の論考など多岐に亘っている。

発刊にあたっての趣旨は、第1号冒頭の論説において「『音楽秋田』創刊」と題して、地域の音楽レベルの向上を目指す決意が次のように述べられている。

我が学生音楽連盟は、その事業の一部を達成すべく茲に月刊「音楽秋田」を発行する。思うに音楽のレベルを向上さすべき最良の方法は、第一に出来るだけ多く「良き音楽」を聴くことであり、第二に出来るだけ多く「音楽を語る機会」を持つことである。吾々は先づ微力をあげて「良き音楽」を聴くことに注ぎ、過去一年に亘って相当の成績を収め得たことは、会員諸君の等しく認められる事であろう。第二の「音楽を語る」機会を持つことは、会場、時日等諸般の関係から殆ど不可能に近く、吾々は長く此事を遺憾として居た。今回機熟し、編集委員を挙げて、「音楽秋田」を発行する所以は畢竟会員諸君に「音楽を語る」機会を提供するに他ならない。

音楽を語る為には先づ音楽を知る事を必要とする。この意味に於て吾が「音楽秋田」は県内に起る音楽事象を細大洩らさず報道すると共に、諸君と共に郷土秋田の音楽に就いて談ずるの紙面を割き、更に中央の諸名士の、わが秋田の音楽界に対する忌憚のない批判なり感想なりをも採録して行きたい。

憾むらくは発刊勿々、経済的の事情は之等の希望を同時に満たす事を許さないが、之は会員諸君の鞭撻と後援とによって遠からず之を満たし得る機会に恵まれる事を確信するものである⁽⁹⁾。

連盟結成1年を経て、「『良き音楽』を聴くこと」という当初の目的は、前掲の表2からも分かるとおり十分に達成されたのだろう。そして、次の段階としての「音楽を語る機会」を得るために『音楽秋田』の発行が試みられたのである。

3. 論説記事に見る樹人の音楽観、音楽教育観

樹人が担当した論説は、最も重要な記事の一つとして各号の冒頭を飾っている(表3)。学生音楽連盟としての主張の形をとってはいるものの、前述の第1号の創刊の辞のように樹人自身の音楽観や音楽教育観が色濃く表されている。

「音楽のレベルを向上さすべき最良の方法」は「聴くこと」であり、しかも「『良き音楽』を聴くこと」であり、その上で「語ること」であるという主張は、音楽を学び向上する上での極めて明快な論理である。

質の良い音楽を聴くためにはそれらを求めようとする欲求が必要であり、さらには十分に音楽の中身を味わえるだけの鋭敏な感性が必要になる。また、「語る」ためには豊富な知識が必要になるだろう。その積み重ねが音楽の力を付けていくという論理は、現代の音楽教育でも全く同じであり、樹人の先見性に富んだ音楽教育観は高く評価すべきものである。

第2号では、「音楽人の自覚」と題して「音楽はリクリエーション以外に目的がない」という音楽観が相当数の知識人にも見られる中、それを払拭する努力が音楽家自身に欠けており、「自分の職業としての音楽に確乎たる理論の裏付けを持たず、ただ漫然として社会のリクリエーションたることが音楽人の使命だと信じている人」²⁰⁾が数多くいることを嘆く。その上で「音楽人が確乎たる音楽に対する信念に立脚し、敢然として人に音楽を説くの勇気を欠いている限り、この啓蒙時代を暉脱して吾々の血となり肉となる音楽の黄金時代を招来することは難事」²¹⁾と指摘する。

樹人自身は戦時中にあっても軍歌を教材とすることはなかったという²²⁾。しかし、世間の捉え方は、音楽教育は戦争の一部であり、音楽は何かの手段でしかなかった。そのような状況から脱し、ようやく純粹に音楽の美しさやよさを楽しめる時代が来たというのに、何の反省もなく何の思想ももたない音楽家が多数存在することが樹人にとっては我慢がなかったのだろう。

第3号の論説「演奏家のモラル」²³⁾は、地域の演奏レベルを踏まえた上での苦言である。「近頃はステージの上で随分ひどい音楽を聴くことがある」と始まり、「今音程が外れはせぬか、テンポが狂いはせぬかと、少しでも耳のある聴衆をヒヤヒヤさせる演奏をしたのではこれはある意味に於いて聴衆を侮辱するものである」と強い調子で指摘する。さらに、「音程やテンポを正しく歌うことはあれは一応楽曲を整えることであって、厳密の意味で練習の出発点とは言い得ても練習そのものとはいえない。練習とは反復奏唱することによって曲の内容を残る隅なく理解することである」と述べた上で、「自分の力量に比して少しく容易な曲を選び、而も練習に練習を重ねてしっかりと身につけた上で発表することこ

表3 論説のタイトル

第1号	「音楽秋田」創刊
第2号	音楽人の自覚
第3号	演奏家のモラル
第4号	断片語
第5号	新春苦言
第6号	埋蔵楽器を発掘せよ

そ演奏家の必ず守らねばならぬモラルである」と結ぶ。

表2で示したように、当時は中央の楽壇で活躍する演奏家の生演奏に触れる機会も増え始めた時期であり、地方の洋楽愛好家には向上心とともに華やかなレパートリーに対する憧れもあったのだろう。学生のみならず地域の音楽愛好家が自己の技量の程度も顧みずに背のびして難曲に挑戦する姿が目につかぶようである。

第4号の「断片語」は、樹人の音楽観と音楽教育観が最も顕著に表れたものである。ここで述べられている内容は花輪高女時代の生徒会誌⁽²⁴⁾⁽²⁵⁾でも同様のものが掲載されており、樹人の音楽教育実践に通底する揺るぎのないものであることが分かる。

歌うことは聴く事である。弾くことも亦…。

音楽は聴く為にのみ存在する。歌い又弾く為に存在するのではない。

歌いたい又は弾きたい衝動は聴きたい衝動でもある。

聴きたい衝動に駆られる時自ら歌って之を聴き聴きたい衝動に駆られる時自ら弾いて之を聴く。斯くして心を、魂を豊かにする事こそ音楽の第一義的な存在理由である。

人に聴かせんが為にする音楽は第二義的の音楽であり、之を職業とする人は天分を有する少数の所謂名人を以て足れりとする。

故に之等の職業人を、育成するには飽くまでも名人教育に従うべきであり、一語を歌い、一音を弾くにも些の懈怠を許さない。

併し謬って名人教育を普通教育の目的と置換する時音楽の進歩は停頓する。

借問す、世の音楽教育に携わる諸君よ！諸君は教科書中にある、或る一曲を巧みに唄わしめんが為に、教科書以外の曲は何一つ—それは如何に簡単な旋律であっても一唄う事の出来ぬ生徒を養成した体験が無いであろうか？

教育目的の齟齬は恐ろしい。斯たる誤った目的を以って、音楽教育の興隆を望む事は百年河清を待つに等しい。

音程の不精確さは須臾にして是正することが出来る。併しあらゆる音楽の根柢をなす読譜力の貧困は直ちに之を救済することが出来ないではないか。

「心を、魂を豊かにする」ことが音楽の存在理由の第一であること。音楽教育の実践にあたっては専門家を育てるための「名人教育」と一般生徒に対する「普通教育」を混同してはならないこと。目的を誤れば音楽教育の興隆を望むことはできないこと。これらの主張は、当時の秋田県の音楽教師たちに向けてのものであろうが、今日の音楽教師に対する戒

めとしても真摯に受けとめなければならない言葉である。

第5号では、当時の中年層から老年層にクラシック音楽の普及や理解が進んでいないことの苛立ちが述べられている。「新春苦言」²⁶⁾と題された論説では、大層な文学全集を揃える一方で「ロクな音盤は一枚も持たぬ、所謂インテリの家庭が多いのはどうしたものであろう？流行歌と童謡以外には音楽がないとでも思っているのであらうか？それとも音楽は女子供の慰みものに過ぎないとでも思っているのであらうか？」と嘆いた上で、さらに「日本の中年層から老年層へかけては感情や思想が硬化している故か、所謂「喰わず嫌い」が多くて閉口する事が多い。音楽と云えば頭から解らぬものと決めて掛けて、之を味わうとする者のない事は慨はしい極みである」と続ける。

学校教育において「唱歌」という授業名で行事のための歌を覚えることが「音楽」であった世代にとっては、成人してからも親しみやすい童謡や流行歌、軍歌が「音楽」であった。西洋のクラシック音楽は昭和20年代半ばにあっても未だ馴染みのない音楽であり、一部の愛好者による狭い世界の趣味であったのだろう。

第6号の「埋蔵楽器を発掘せよ」²⁷⁾は、戦後の音楽事情の一面を示すものとして興味深い。それによると、戦前から戦時中にかけて日本全国に普及していた吹奏楽が「戦争が終わると同時に影をひそめて、現在ではプラスバンドの演奏など暫く耳にした事がない」状況になったという。

戦時中の吹奏楽は、出征軍人の歓送迎会やスポーツの入場式の際に「青年団員や生徒諸君がブカブカドンドンと戦闘意識を掻き立て」る役割をもっていたが、戦争協力の一手段になっていたことの反省のためか、戦時中に市町村で寄付を集めて購入された楽器は全く姿を見なくなった。樹人は「戸外に於いて多数の聴衆に対して優美な曲を奏して、平和愛好心を促進する事も出来る」と述べた上で、「埋蔵楽器」を活用して「昔のような旺んな吹奏楽の黄金時代を現出する事」を提言している。

樹人の弟六郎は、東京上京後の12歳の頃に樹人とともに青山の住居から日比谷までの一里の道を歩いて軍楽隊の演奏を欠かさず聴きに行っていたという²⁸⁾。六郎が12歳というのは明治38(1905)年のことである。この当時の日本の軍楽隊は行進曲などの野外の吹奏楽向けのレパートリーに加えて管弦楽曲の編曲作品も積極的に演奏していた²⁹⁾。十分な力量をもつ管弦楽団が無いためであったかもしれないが、「ブカブカドンドン」の吹奏楽ではなく、クラシックの名曲を悠々と演奏する吹奏楽の音を樹人は十分に知っていたのである。

だからこそ、戦争の一手段ではない「音楽本来の有り様」を示すような吹奏楽の役割を期待したのであろう。

4. おわりに

以上、本稿では『音楽秋田』の論説を主な対象として小田島樹人の音楽観、音楽教育観を考察してきた。

樹人が担当した論説及び関連の記事内容を考察した結果、昭和20年代半ばの秋田県では戦後の混乱から落ち着きを取り戻し始め音楽を楽しめる環境が急速に整っていったこと、しかし一方では音楽に対する旧来からの無理解や偏見も多く見られたこと、そしてそのような状況の中、小田島樹人は自己の音楽観、音楽教育観を『音楽秋田』の誌上で強く訴え、

地域の音楽活動を啓発する役割を担ったことなどが明らかとなった。また、秋田県という一地方ではあるが、当時の音楽に対する一般的な認識の程度や未だ戦争の影を引きずる地方の音楽事情も確認された。

樹人が『音楽秋田』の誌上において音楽教師や音楽を愛好する多くの若者たちに対して主張した音楽観、音楽教育観は、今なお色褪せない先見性に富んだものとして高く評価されるべきであろう。

この小論では論説を主な考察の対象としたが、『音楽秋田』は戦後の地方の音楽事情を考察する上で極めて有益な資料である。演奏会記事から演奏者、曲目、批評を詳細に分析することによって昭和20年代の日本の楽壇の状況を捉えることもできるだろう。また、新県民歌募集、自治体によるグランドピアノの購入、占領軍との関わりなどの記事もあり、詳細に分析することによって戦後の地方の音楽事情をより生々しく捉えることもできると考える。それらについて機会を改め、考察していくことが今後の課題である。

〔謝辞〕

本稿を執筆するにあたり、東京藝術大学総合芸術アーカイブセンター大学史史料室の橋本久美子氏から関係史料の調査閲覧について多大なるご協力をいただきました。また、小田島輝夫氏、山口靖子氏、山口淳氏、嵯峨正博氏からはお忙しい中、聞き取り調査にご協力いただきました。この場を借りまして皆様に心からの感謝を申し上げます。

註と文献

- 1) 佐川馨 (2013) 「小田島樹人研究—その生涯と教育業績」『日本教科教育学会誌』第36巻4号、投稿審査中
- 2) 「ディ マイスタージンガー (一)」第四巻第七号 (大正2年7月), 「ディ マイスタージンガー (二)」第四巻第八号 (大正2年8月), 「エールディの小伝並びに彼の歌劇」第四巻第十号 (大正2年10月), 「ワーグナーの観たるベートーヴェン (一)」第五巻第二号 (大正3年2月), 「ワーグナーの観たるベートーヴェン (二)」第五巻第四号 (大正3年4月) (国立国会図書館マイクロフィッシュ)
- 3) 吉田久五郎 (1972) 「岩手県における唱歌教育創始についての一研究」『岩手大学教育学部研究年報』第32巻第4部 (1), pp. 61-66
- 4) 安田寛・北原かな子 (1998) 「弘前における洋楽受容のはじまり」『弘前大学教育学部紀要』第79号, pp. 51-62。同 (1999) 「弘前女学校の音楽教育」『弘前大学教育学部紀要』第82号, pp. 87-95。同 (2000) 「明治期の津軽地方における讃美歌の受容—明治初期から三十年代前半まで—」『弘前大学教育学部紀要』第83号, pp. 77-85。同 (2001) 「明治四十年前後津軽地方における洋楽受容に関する考察」『弘前大学教育学部紀要』第85号, pp. 91-98
- 5) 笹森建英, 今井民子 (1991) 「地方に於ける洋楽の普及—明治期の弘前市における唱歌教育—」『弘前大学教育学部教科教育研究紀要』第14号, pp. 33-48
- 6) 佐川馨 (2010) 「学校教育創始期の秋田県における音楽教員の系譜」『秋田大学教育文

- 化学部研究紀要』教育科学65, pp.27-38
- 7) 昭和26年度に秋田学生音楽連盟会長を務め、樹人とともに『音楽秋田』の編集に携わった嵯峨正博氏への聞き取り調査(2013年11月29日, 秋田市)によれば、26年度中は学生音楽連盟の役員が編集業務をしていたが、翌27年に母体である秋田音楽同好会が会長の鈴木英一氏の死去により活動を停止したことにともない、秋田学生音楽連盟の活動も停止したため、6号までの発行で止まった可能性が高い。
- 8) 鹿角市(1991)『鹿角市史第三卷(上)』, pp.607-612
- 9) 鹿角市(1991)同書, pp.571-572
- 10) 鹿児島造士館に進学した経緯は姪の山口靖子氏からの聞き取り調査による(2013年7月6日, 秋田市)。
- 11) 鹿角市(1997)『鹿角市史第五卷』, p.285。奈良東一郎(1996)「阿部六郎, 人間とその流域」『芸文かづの』第二十二号, 鹿角市芸術文化協会, p.24
- 12) 小田島樹人先生顕彰会(1993)『小田島樹人 人と音楽』, p.4
- 13) 樹人の在学中の学修状況は東京藝術大学総合芸術アーカイブセンター大学史料室保管資料から確認できる。『明治四十二年学年試験成績』では樹人の成績は予科修了時点で首席である。『明治四十三年学年試験成績』では樹人の名前が見られず、続く『明治四十四年学年試験成績』には本科器楽科に氏名と成績が記載されている。正式な休学の記録は学務関係の綴りにも記載はないが、休学時期は本科進級1年目と推察できる。
- 14) 東郷京子(1993)「絆」『小田島樹人』小田島樹人先生顕彰会, p.72
- 15) 大山会三郎(1969)「小田島樹人」『広報あきた』3月号, 秋田市, p.51
- 16) 秋田学生音楽連盟会則(『音楽秋田』第6号, 昭和26年6月15日, (2))
- 17) 太田寿男(1993)「樹人先生と私-秋田学生音楽連盟誕生のころ」『小田島樹人』小田島樹人先生顕彰会, p.86
- 18) これらの演奏記録は『音楽秋田』の演奏会情報, 音楽批評を整理したものである。
- 19) 小田島樹人(1950)「『音楽秋田』創刊」『音楽秋田』秋田学生音楽連盟(昭和25年9月10日, 第1号, (1))
- 20) 小田島樹人(1950)「音楽人の自覚」『音楽秋田』秋田学生音楽連盟(昭和25年10月10日, 第2号, (1))
- 21) 小田島樹人, 同上
- 22) 野口力(1993)「恩師小田島先生のこと」『小田島樹人』, 小田島樹人先生顕彰会, pp.11-12
- 23) 小田島樹人(1950)「演奏家のモラル」『音楽秋田』秋田学生音楽連盟(昭和25年11月20日, 第3号, (1))
- 24) 小田島樹人(1938)「音楽教師のノート」『紫根』第10号, 県立花輪高等女学校校友会, pp.17-18
- 25) 「音楽教師のノート」全文
- A Singen ist Hoeren! 歌うことは聴くことである。
- B 一切の音楽は聴くために存在する。歌うために、或は奏でるために存在するのではない。
- C この哲学が解らない人に一切の音楽教育が出来よう筈がない。少なくとも人間の血と

なり、肉となる音楽は教えられない。

- D 世の中には人に聴かせんがために一生懸命音楽を修業している人がいる。所謂音楽家と云う連中である。だから所謂音楽家には本当の意味の音楽教育は出来ない。彼等は単に人に聴かせんが為の音楽を教え得るに止まる。
- E 自分が歌うために習う音楽は第一義的なものであり、人に聴かせんがために習う音楽は飽くまでも第二義的なものである。茲の所が教師にも生徒にも徹底するとき、其所から初めて良き音楽が生れる。
- F 新即物主義の音楽と云い、多調音楽、無調音楽の台頭と云い、音楽界にも時事問題は山ほどある。吾々も全音階的音楽の塔を出でて、暫くは是等の囂々たる音楽の響に耳を藉す余裕があつて欲しいと思う。
- G 良き音楽と然らざるものとを画然と弁別しうる力を与えることも、之からの音楽教師が当然背負わねばならぬ重荷の一つとなった。
- H 少なくとも教壇に立っている間は、音楽教師の心は聖者のそれであらねばならない。
- I 世路の羊腸崎嶇は果しがたい。若し悪魔の手が間近く諸君に迫る時あらば崖頭に立って「母なる女神の一節を口吟み玉へ。この歌の一ふしは涙と共に異常な力となって、底知れぬ誘惑の谷底へ顛落することから、諸君を救うかも知れない。音楽の力強さは其所にある。
- 26) 小田島樹人 (1951) 「新春苦言」『音楽秋田』秋田学生音楽連盟 (昭和26年 1月30日, 第5号, (1))
- 27) 小田島樹人 (1951) 「埋蔵楽器を発掘せよ」『音楽秋田』秋田学生音楽連盟 (昭和26年 6月15日, 第6号, (1))
- 28) 小田島樹人 (1951) 「秋田好楽家列伝 (6) 阿部六郎氏の巻」『音楽秋田』秋田学生音楽連盟 (昭和26年 6月15日, 第6号, (1))
- 29) 谷村政次郎 (2010) 『日比谷公園音楽堂のプログラム—日本吹奏楽史に輝く軍楽隊の記録—』つくばね社

* 本研究は、平成24～25年度の J S P S 科研費24531173の助成を受けたものです。

Summary

SAGAWA Kaoru :
A Study of Jujin Odajima (II)
—His Views on Music and Music Education—

The purpose of this paper is to examine the theses written by Jujin Odajima which were published in the monthly Journal “Music in Akita” in an effort to clarify his views on music and music education. It also intends to clarify through related articles some of the situations surrounding music in Akita Prefecture during the recovering period right after World War II.

“Music in Akita” is a tabloid newspaper whose publication started on September 10, 1950 by the Association of Students of Music in Akita Prefecture. The contents of articles cover a wide range of topics, from such community-related news as concerts held in Akita, activities of Akita-born musicians, and newly established organizations of music lovers, to such serious articles as the history of music by Mitsuru Ushiyama, one of Jujin’s classmates at Tokyo Music School (now Tokyo University of Arts) , who later became professor at the school. Thus, the newspaper contains a body of materials which is of great value in examining not only Jujin’s views on music and music education but also in getting information concerning the music situations in that community around that period of time.

As a result of having examined the contents of Jujin’s theses and related articles, it has become clear that Akita during the mid-1940’s was beginning to regain its quietness after the post-war confusion and that an environment favorable for enjoying music was fast emerging. On the other hand, however, there were still many problems arising from sheer ignorance of and prejudice against music itself. Under these circumstances, it was evident that Jujin’s views on music and music education powerfully expressed in many of his articles had played a leading role in the advancement of the community’s music activities.